

“How procedural experiences shape citizens’ perceptions of and orientations toward legal institutions: evidence from a household survey in Bangladesh”

「手続における経験が、法制度に対する市民の認識の方向性をどのように形作るのか：バングラデシュの家計調査から得られたエビデンス」

Kim A. Young, Shahidul Hassan

Abstract

本論文では、手続的公正及び政策デザインに関する理論及び調査を統合し、制度的な文脈及び経験が、市民の法制度に対する手続的公平、信頼及び信用の感覚をどのように形成するかについて考察する。我々は、バングラデシュの家計調査を通じて収集されたデータを利用してこの問題に取り組んだ。分析によると、法制度に関する市民の経験は、公正を確保するための4つの制度ごとにそれぞれ異なっており、意思決定過程の開放性、意思決定者の能力に対する認識、市民が法的サービスを受けるための賄賂の要否が、手続的公平に対する認識に影響を及ぼすことが分かった。さらに、手続的公正に対する認識について、ある制度をもう一度利用しようという市民の意向とは正の相関が見られるものの、当局に従う意向とは相関が見られないという結果も得られた。この調査結果が効果的なガバナンスに与える含意についても論じた。

Points for practitioners

我々はバングラデシュにおける法制度に対する市民の認識が、どのような制度上の特徴から形成されるかについて検討した。本論文の結果は、意思決定者の法的及び社会的能力並びに明確さを担保する努力の重要性に注意を向けさせるものである。手続的公正に関するほとんどの先行研究では、発言権の影響に焦点を当ててきたが、他の特徴とともに検討したところ、発言権は最も影響が低いことが分かった。今回の調査によると、意思決定者の能力が最も強く影響を及ぼしており、中でも法律に対する習熟が最も高く評価されている。また、手続的公正に対する市民の認識は、法制度への信頼に影響を及ぼした一方、法的な決定に従うかどうかは、結論の公平さに動機付けられている。ガバナンスの改善は、意思決定者の法的及び文化的能力を強化することによって達成される場合がある。